

矢内原忠雄の「日本的基督教」

— 土着化論再考 —

“Japanese Christianity” of Tadao Yanaihara

— Reconsidering Indigenization —

菊川 美代子

Miyoko Kikukawa

キーワード

矢内原忠雄、日本的基督教、無教会主義、天皇制、土着化

KEY WORDS

Tadao Yanaihara, Japanese Christianity, the Non-church Movement, Imperial System, Indigenization

要旨

矢内原忠雄（1893-1961）は、無教会主義の創始者である内村鑑三の弟子である。内村は「日本人が、外国の仲人を経ずして、直ちに神より受けたる」キリスト教の意で「日本的基督教」という言葉を用いてキリスト教の日本土着化に挑戦し、矢内原はその挑戦を継承した。そしてアジア・太平洋戦争下にあつて、圧倒的大多数の「日本的基督教」が国家に迎合した一方で、矢内原は「日本的基督教」を唱えながらも、国家を絶対化せず戦争批判を貫いた人物であつた。これまでの神学における先行研究では、内村や矢内原の「日本的基督教」構想を分析することで、国家に対して無批判に迎合せず、批判的な距離を保つことのできるキリスト教土着化の望ましいあり方が探られてきた。しかし、本稿では矢内原のそのような「日本的基督教」という言葉を分析し、一見超国家的なものとして意識されている、キリスト教という「世界宗教」が、実はいかに国家に根ざしたものであつたのかということを明らかにする。

SUMMARY

Tadao Yanaihara was a disciple of Kanzō Uchimura, who founded the Non-Church

Movement. Uchimura tried to indigenize Christianity in Japan and named his approach “Japanese Christianity,” by which he meant “Christianity given directly to the Japanese by God without the intervention of any foreign country.” Yanaihara is one of Uchimura’s disciples who inherited this viewpoint. Most contemporary Christians who lived during the Asia-Pacific War period used the expression “Japanese Christianity” to justify state actions without reserve. But he also used the same expression in maintaining his position against the war. In subsequent studies of theology, Uchimura and Yanaihara’s “Japanese Christianity” was studied as one of the best hints on how to indigenize Christianity in Japan without justifying a state without any check on its power and on how to keep an appropriate distance from the state. Therefore, I analyze the term “Japanese Christianity” and consider how Yanaihara was able to take “Japan” as an object of theology. However, I want to prove that Christianity, regarded as one of the world’s great religions and supra-national, actually arises through studying his idea of “Japanese Christianity.”

1. はじめに

矢内原は、無教会主義の創始者である内村鑑三の弟子である。内村は、「日本人が、外国の仲人を経ずして、直ちに神より受けたる」¹キリスト教の意で「日本的基督教」という言葉を用いてキリスト教の日本土着化に挑戦した。矢内原はそれを継承した弟子の一人であった。アジア・太平洋戦争下に生きた矢内原は、国家に翼賛した「日本的基督教」を批判し、自らの考える「日本的基督教」が真の「日本的基督教」であると主張し、それを根拠として戦争批判を行った。

現在、「日本のキリスト教」をどのように考えるかということが注目されており、かつての、いわゆる「日本的基督教」の位置づけに関心が集まっている。原誠が述べるように、戦時下という極限状況のなかで

この時代の世相に深く呼応しようとした「日本的キリスト教」……は……日本の近現代史におけるキリスト教の位相が凝縮されて、そのキリスト教受容の質において、この思想運動が日本におけるキリスト教の土着化への「萌芽」として検討しうる可能性を秘めている……。 (中略) われわれは、その思想的表現や言質からのみ見て、たんに右翼・国粹主義的、軍国主義的であった、という一遍の言葉で一蹴すべきではない²

圧倒的大多数の「日本的基督教」が国家に翼賛した一方で、矢内原はアジア・太平洋戦争下において「日本的基督教」を唱えながらも戦争批判を貫いた人物であった。大木英夫の言葉を借りるならば、矢内原の「日本的基督教」は、「日本をトータルかつラディカルに対象化」し、国家への「見張りの役」を果たしたとされてきた³。したがって、内村や矢内原の「日本的基督教」構想を分析することで、国家に対して無批判に迎合せず、批判的な距離を保つことのできるキリスト教土着化のあり方が探られてきた⁴。

だが、「日本的基督教」とは、その言葉から分かるように、「世界宗教」である「普遍的な」キリスト教を、日本という「特殊な」立場から理解するという前提で語られているのである。したがって、本稿では、一見超国家的なものとして意識されている「世界宗教」という宗教意識が、実は国家に根ざしたものであったことを矢内原の事例から明らかにする。

以下、第二章では、アジア・太平洋戦争下において矢内原が主張した「日本的基督教」構想を無教会主義との関連から分析する。続く第三章では、矢内原における「日本」を、その民族観から検討する。そして最後の第四章において、矢内原の「日本的基督教」の再評価をし、本稿を結びたい。

2. 「日本的基督教」構想と無教会主義

(1) 先行研究の検討

矢内原に関してはすでに多くの先行研究が存在する。しかし、これまでの矢内原論・研究は、いまだその大多数が彼の信仰上あるいは学問上の弟子などによる、アジア・太平洋戦争下における戦争批判を強調したものと、あるいは矢内原の専門領域であった植民政策学、経済学の「限界」を批判するマルクス主義者や朝鮮研究者らによる見直し論である⁵。また、矢内原の死後50年が経過した現在も、伝記を除けばその全体像を記したものは、鴨下重彦、木畑洋一、池田信雄、川中子義勝編『矢内原忠雄』（東京大学出版会、2011年11月発刊予定）のみである。

また、「日本的基督教」構想に焦点を当てた研究も多くない。管見の限りでは、横山貞子「キリスト教の人びと プロテスタントを中心にして」（『共同研究 転向』中、平凡社、1960年、339-368頁）、笠原芳光「「日本的キリスト教」批判」同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会『キリスト教社会問題研究』22（1974年、114-139頁）、藤田若雄「総論」（同『内村鑑三を継承した人々（下）——十五年戦争と無教会二代目』木鐸社、1977年、15-71頁）、古屋安雄、大木英夫『日本の神

学』（ヨルダン社、1989年、7章）、宮田光雄『権威と服従——近代日本におけるローマ書十三章』（新教出版社、2003年）、宮田光雄『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』（岩波書店、2010年）において部分的に取り上げられているのみである。

矢内原は戦争批判という抵抗の側面においては高く評価されてきた一方で、その「日本的基督教」構想への評価は、彼の天皇制支持の立場ゆえに別れており、いまだ定まっていない。したがって、本稿では矢内原が天皇制を支持することにより戦争批判の論理を導き出したことを考慮する⁶。それゆえ、本稿では矢内原の「日本的基督教」を、その天皇制支持の要素を含むというだけで「限界」を指摘して終わるのではなく、彼の天皇制支持の内在的論理のなかでどのような点に「限界」があったかを掘り下げてみたい。その前段階として、次節では矢内原の考える「日本的基督教」構想を検討する。

(2) 「日本的基督教」構想

矢内原は、自らの主張した「日本的基督教」が、戦時下において多数派であった他の「日本的基督教」とは一線を画していたという自負を持っていた。1946年12月8日に雑誌『朝日評論』に掲載した論文「日本の基督教」のなかで、戦時中に隆盛した「日本的基督教」について、「過般の戦争中或る人々の唱えた日本的基督教……は戦争の圧迫の下に起った基督教の歪曲」⁷であったと回顧していることからそれは明らかである。それでは、矢内原の考える「日本的基督教」とはどのようなものだろうか。

矢内原によれば、「基督教の展開としてみたる場合に、欧米諸国の為しうる貢献はほぼ尽した」のであり、「基督教がまだ本当に試みられておらないところの世界的強国は、わが国」であるという。なぜなら、日本のキリスト教は欧米伝来のものであり、キリスト教が日本国民に普及している範囲がごく少数だからである。だが、キリスト教発祥の地はアジアであり、「キリスト自身が……キリストの先駆たる預言者たちも凡てアジア人」である。そのため、「聖書はアジア人の心でなければわからない。少くともアジア人の心でなければわからない所があるに違いない」のであるから、「西洋人は基督教を受け容れたけれども、また歪めてしまった」⁸。したがって、同じアジア人である日本人が、日本人であるという限定性を持ちつつも、「基督教の真理を歪めずして透明に、透徹った真清水の如く把握」する必要があるのであり、それこそが「日本的基督教の使命」である⁹。ここから、西洋ミッションから精神的および経済的にも独立することは「日本的基督教」にとり、自明かつ必須のことである。そして「日本的基督教が其の名に値する為めには、日本国を愛するものでなければなりません」と述べる¹⁰。

基督教によって国家を愛するのが真の愛国であります。そして我が国民の国家思想が特別に強く、国体観念の特別に濃厚なることを思いますれば、国家道徳の本義と国体観念の意義、即ち『国』ということ、それから進んで『神の国』ということの真理をば顕現することが、日本的基督教の使命の一つであるかもしれません。……中にも悲劇的なことには、日本的基督教が世俗の日本主義と戦わねばならない事であります。……そして斯く日本国を愛する為めに傷つけられた其の犠牲が、即ち日本的基督教であります。¹¹（傍点引用者）

このように、矢内原にとり「日本的基督教」とは「世俗の日本主義と戦わねばならない」ものだった。そして「世俗の日本主義」が隆盛しているのは、日本国民の「国家思想が特別に強く、国体観念の特別に濃厚」なることに由来するという。だが、それは同時に「『国』……進んで『神の国』の真理をば顕現することが、日本的基督教の使命の一つ」であるかもしれないという、キリスト教への貢献に転化しうる可能性をもつものでもある。

以上をまとめると、矢内原の「日本的基督教」構想の要諦とは、西洋教会から精神のおよび経済的に独立すること、また愛国的であることの二つであるといえる。すなわち、矢内原によれば、西洋教会からの独立により、日本人がキリスト教の「真理」を「アジア人の心」をもって把握すること、また、そのように把握されたキリスト教によって国家を愛する「真の愛国」が可能となる。そして、この二つが「日本的基督教」が「世界宗教」たるキリスト教になしうる「特殊な」貢献であった。次節では、この「日本的基督教」と無教会主義とはどのように関連しているのかを検討する。

(3) 無教会主義との関連性

矢内原は前掲論文「日本の基督教」のなかで、無教会主義と「日本的基督教」との関連性について以下のように述べている。

無教会のいう日本的基督教は次の二つの点に帰する。

第一は、素直な、真実な日本人の心に植えられた基督教であること。換言すれば外国からの借り物でないこと。

第二は、日本を愛する愛国的基督教であること。換言すれば個人の救いに満足して国を愛する精神を失ってはならない。

これが真の日本的基督教である¹²。

矢内原は、「無教会のいう日本的基督教」こそが「真の日本的基督教」であると考えていた。前節で述べた経済的独立についてはこの箇所では直接的には触れられていないが、「第一」の項目において「外国からの借り物でないこと」を主張していることから、その主眼は西洋教会からの独立にあるとみてよいだろう。すなわち、矢内原の「日本的基督教」構想は無教会主義と一致するということである。

彼の師である内村は「日本的基督教」の「天職」として、「日本人の基督教は一致和合の基督教でなくてはなりません、日本に於ては宗派は根絶しねだやにしママ為さなければなりません」と、宗派の根絶を主張した¹³。しかし、矢内原のそれは、以上見てきたように、日本国民の「国家思想」と「国体観念」をキリスト教の福音により昇華し、「『国』……進んで『神の国』の真理をば顕現すること」であった。したがって、矢内原の「日本的基督教」は、西洋教会からの精神的小よび経済的独立を必須の要件とする点では内村と共通するが、内村のそれとの差異も存在した。「日本的基督教」の使命を、内村は国内のキリスト教が宗派の根絶により「一致和合」することだと考えていたが、矢内原は日本の「国家思想」と「国体観念」をキリスト教の福音により昇華して、「『神の国』の真理を顕現」し、それを通しての「一致和合」を目指していたといえよう。「一致和合」を内村は宗派根絶という、いわば内側から、矢内原は「『神の国』」という外側から成し遂げようとしていたのである。以下、矢内原の考える無教会主義について考察をしてみたい。

戦時下の矢内原は、唯物論と全体主義に面している既成宗教教団に向けて、「宗教再改革」「第二の宗教改革」の必要性を訴えていく。前者については、支配階級と妥協し、その保護下において自らも支配階級の一部となり人民を搾取している「制度化による宗教の腐敗」に対して、今こそ「霊と真実とをもって神を拝する」「エクレシヤ思想の発揚のために宗教再改革の必要がある」という¹⁴。後者については、「全体・統制・指導者性を高潮する」全体主義は指導者原理に立つものであるから、その指導者は「責任を知る自由なる個人」以外であってはならない。そして、「エクレシヤ観を純粹に把握し、且つ積極的に展開することによって、基督教は全体主義に『たましい』を吹き込む事が出来る」のであり、そのような個人を作りえるのであるから、そのために宗教改革がなされねばならないという。すなわち、「現代宗教改革の特別の任務は、社会の全体主義を唯物的若しくは秘密警察的解釈より救い、之に道德的意義を賦与することに存する」¹⁵。

上述のように、エクレシヤ概念が矢内原の既成宗教教団批判の核である。矢内原は、無教会主義におけるエクレシヤの位置づけについて以下のように述べる。

キリストを信ずる者の世界的一体としてのエクレシヤは無教会主義者の最も重

んずる思想の一であり、又その現実の体験でもある。却てかかる世界的教会、かかるエクレシヤの最も純粋にして且つ最も包容的な実現の運動として、無教会主義は存在して居るのである¹⁶。

この文章から、宗教改革の主体は無教会主義であるとの矢内原の考えは明白である。矢内原によれば、エクレシヤは「霊的な集り」「霊的な交り」であるゆえに「外国の勢力とか思想とか金銭とか制度とかいうものから、完全なる独立を有たなければ」ならず、そのような「完全なる独立」こそが「日本的基督教」であると論じる。したがって矢内原は、唯物論と全体主義に覆われていた当時の社会に対して、唯物論に対しては制度的宗教の弊害を斥け、全体主義に対しては「全体主義に進歩的積極的意義を有たしめ、その反動化を救うことを得る」¹⁷ところであるエクレシヤの「最も純粋にして且つ最も包容的な実現の運動」たる無教会主義を宗教改革の主体とした。そしてその実現こそが「日本的基督教」であると考えていたのであった。

一方で、このような理解に対しては、すでに無教会内部から疑義が提出されている。

確かに、理念的には無教会キリスト教は、世界性・普遍性を本質とする純福音である。しかし現実には、それは「日本人」内村に示された純福音であるから、その純福音には「日本」が離れがたく食い込んでいる。しかもその日本は、信仰的に理想の「日本」でもある。……一般的には、日本的キリスト教の「日本」は、純福音の世界性・普遍性を制約する要因となりうる。したがって、「無教会キリスト教イコール日本的キリスト教」という主張を前面に押し出すと、無教会キリスト教ないし無教会概念の一面的把握に陥るおそれがある¹⁸。

しかし、「内村に示された純福音」すなわち啓示は、その性質上、「すでに何者かによって受け取られて存在している」。今日の視点からすれば、『『純粋なキリスト教』などというものは、どこにも存在しない』のである。啓示には受領者があり、受領者には文脈があり——この場合の文脈とは「日本」となる——、啓示は文脈を離れては存在しえない¹⁹。したがって、「日本」を「純福音の世界性・普遍性を制約する要因」とただラベリングして議論を終わらせてはならない。内村と矢内原は、上述のように、日本人であるという限定性、つまり自らの本質的な決定不能性を認識したうえで、なお「日本的基督教」を語ろうとした。われわれは、彼らのなかに存在した「日本」という「日常の価値観や伝統がひとつの言説あるいはナラティブとして、そこで生きる人間にとっては圧倒的なリアリティをもって存在した事実を受け止め」²⁰、そ

の事実をこそ分析の俎上に乗せる必要があるのではないだろうか。

ここまで、矢内原の「日本的基督教」構想および無教会主義について考察してきたが、矢内原は「日本」を、あたかも説明を要さない自明の概念のように扱っている。だが、これまで見てきたように、矢内原の「日本的基督教」は日本国民の「国家思想」と「国体観念」をキリスト教の福音により昇華し、「『国』……進んで『神の国』の真理をば顕現すること」をその使命とするものであり、日本の「国家」と「国体」の内実が鍵となる。そのため、次章では矢内原の考える「日本」について検討する。

3. 「日本」とは何か

矢内原は、「日本」に言及する際に、日本という「国家」の内実を積極的に論じず、「日本人の民族精神・民族性」について重点的に論じているが、それは彼の「民族」観に由来する。

矢内原によれば、「民族といふ語は欧州諸国語の Nation といふ語の訳語」であり、国家をなしている国民と、民族という語には概念上の区別がある。例えば、当時の「朝鮮人は……日本国の人民」であり国家を形成していない一方で、「併し民族として尚お……一つの存在」を持っている。あるいは、一つの民族が複数の国家を形成している場合もある。例えば「独逸民族」は国民としてはドイツ、オーストリア、スイスに分かれているが、「民族としては独逸民族である」。このように、一つの民族が複数の国民に分かれているケース、また一つの国民のなかに複数の民族を含んでいるケースがあるため、「民族と国家は同一概念でない」²¹。こうして矢内原は、国家よりも「一つの総括的、統一的なる団体」²²たる民族に着目するのである。そのため、矢内原のいう「日本」とは、必ずしも国家を意味するわけではなく、文脈により民族を指し示す場合もあり、前後の文脈により区別する必要がある。

また、各民族はそれぞれに異なる「精神的特性」を持っており、それを「民族性」という。それは「民族そのものが歴史的である様に……歴史的に出来て来たもの」である。そうであるならば、「民族性」の歴史性は「『継続』」という点にあらわれる。そして矢内原は、「日本民族の民族性」として、家族よりも家を重んずる「家主義」と、「国体観念」の二つを挙げる²³。前章で見たように、矢内原は日本の「国体観念の特別に濃厚」であることを「日本思想の精髓」「日本思想の最美点」²⁴と述べていた。そして、福音により矢内原が正しいと考える方向にそれを導くことで、それは「世界宗教」たるキリスト教に貢献しうる「日本的基督教」の「特殊な」美点たりえると考えていた。矢内原が戦時中の抵抗において高く評価されてきた一方で、その「限界」としてしばしば批判されてきたのが、彼の抱いていた「国体観念」であっ

た。その際に引用されているのが次の箇所である。

私は真に日本人の心によって基督教が把握せられて、本当の歪められないところの基督教が日本に成立つ、日本に普及する、其の時の光景を考えてみますと、上に一天万乗の皇室がありまして、下には万民協和の臣民があつて、何の掠めとる者も泣く何の脅す者もなく、正義と公道が清き川の如くに流れる。そういう国を私はまぼろしに見るんです²⁵。

矢内原は天皇制を強く肯定し、日本と皇室は不可分のものであり、その不可分性こそが日本の「民族性」、つまり「国体」だと考えていた。これに対し、土肥昭夫は、矢内原が「一君万民の天皇制イデオロギーから解放されることは困難であった」原因を、彼が大正デモクラシーの時期に天皇制国家によって最高水準の教育を受けるという恩恵にあずかり、東京帝国大学教授であったという経歴に起因するエリート主義に帰す²⁶。確かにそれも一つの視点であろうが、本稿は矢内原の民族観に注目し、その原因をさらに掘り下げてみたい。

矢内原は民族と人種の関係について、次のように述べる。民族と人種は同じではなく、例えば黄色人種のなかにも「日本民族もあれば漢民族もあれば朝鮮民族もある」ように、一つの人種のなかに様々な民族が存在する。さらに一つの民族のなかにも、そのなかには様々な人種が混在している。そして「日本民族」の中には「天孫人種もあるし、アイヌ人種の血も入って居る」というのである。つまり、矢内原は皇族を「天孫人種」だとして、「アイヌ人種」と並列できる人種のカテゴリーを設定しているのである。

日本人の民族性の特色……は国体観念であると思う。即ち日本国民の皇室に対する観念はただ国家の権力者というだけではなく、国家権力の主体であらせ給うという意味で畏みまつるという事も勿論でありますけれども、それだけでなしに我々の血縁上の御本家、宗家としての親愛の念を有って居るという事が日本国民の特色である²⁷。(傍点引用者)

矢内原を含む当時のキリスト者の多くは天皇に強い親愛の情を抱いていたが、矢内原の特色は、その親愛の情の根柢を「血縁」共同体たる民族に置いたことにあるといえる。また、文脈的に見るならばこの引用箇所中の「日本国民」は「日本民族」と同義であろう。だがその一方で、皇室は「国家の権力者」「国家権力の主体」とされている。このような天皇観について、姜尚中は次のように述べる。

「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と定めた大日本帝国憲法第一条は、「国体論」の天皇絶対性をあらわしている。しかし他方では第四条（「天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ依リテ之ヲ行フ」）や、第五十五条（「國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任ス」）などに規定されている通り、立憲君主としての天皇は、憲法と議会・政府によって制約された存在でもある。後者で見ると、天皇は憲法の〈内部〉に封じ込められた立憲君主であり、国家の最高機関として位置づけられうるはずだ。……だが、前者の天皇は、明らかに憲法の〈外部〉に屹立する絶対者である。しかもその絶対性は、王権神授説的なアブソリュティズムとは違った、むしろ「神としての神聖祭祀王」を示しているのである。この「矛盾」を統合的な解釈システムとして確立するための意匠こそ、「現人神」としての天皇にはほかならない²⁸。

矢内原においても、姜尚中が指摘するように、天皇とは普遍性を主張する西洋憲法の理念に基づく国家の立憲君主であると同時に、日本の文化的特殊性を体現する存在として立ち現れているのである。そうして、矢内原は天皇を「西洋／日本」という対立項を超え出た存在として「国体」と同一視し、合理的批判の俎上には決して上げることのできない闕外の存在としたのである。以上が矢内原の考える「日本」であり、「国体」であった。

4. おわりに

これまで、本稿では、矢内原の「日本的基督教」について考察してきた。矢内原の考える「日本的基督教」の「天職」が、日本国民の「国家思想」「国体観念」をキリスト教の福音により昇華し、「『神の国』の真理をば顕現すること」であったことを明らかにし、師である内村とは、西洋教会からの独立といった共通の基盤を持ちつつも、差異のあったことを示した。さらに、矢内原の「日本的基督教」と無教会主義とは、西洋教会から精神的および経済的に独立すること、また愛国的であること、との二つの要諦において一致していた。その要諦を実現するには宗教改革によるエクレスシア概念の徹底が必要であり、宗教改革の主体は無教会主義であり、その実現こそが矢内原の考える「日本的基督教」の使命であった。また、矢内原の天皇制批判の「限界」を、その民族観から明らかにした。

本章では、以上の議論をふまえ、矢内原の「日本的基督教」の再評価をして本稿を結びたい。アジア・太平洋戦争において戦争批判を貫徹した矢内原の「日本的基督

教」は、国家に最高の価値を置く国粹主義、またそれに付随した、同時代の圧倒的多数派たる「日本的基督教」とは一線を画した。エクレシアの徹底を唱える矢内原の「日本的基督教」は、現存の宗教をほとんど否定するものであった。その意味で、矢内原は「日本をトータルかつラディカルに対象化」し、国家への「見張りの役」を果たしたといえる²⁹。

しかし、本稿の冒頭で述べたように、「日本的基督教」とは、その言葉から分かるように、「普遍的な」「世界宗教」であるキリスト教を、日本という「特殊な」立場から理解するという前提で語られるものである。矢内原は日本の「国家観念」と「国体観念」を「普遍的な」「世界宗教」たるキリスト教の福音により昇華し、「『神の国』の真理をば顕現すること」を「日本的基督教」だけが果たしうる「特殊な」使命と考えていた。矢内原の事例は、一見超国家的なものとして意識されている「世界宗教」という宗教意識が、実は国家に根ざしたものであったことを実証しているのではないだろうか。なぜなら、そのように「日本的基督教」の「特殊な」使命を設定するには、矢内原自身が全世界を鳥瞰するような超越的立場に自らを置かねばならないからである。つまり、「日本的基督教」とは、まさに自国民を中心とする普遍主義を前提にしなければ不可能なのである。そして、矢内原の「日本的基督教」は、天皇を中心とした民族観に基づく国家観と国体観を元に構想されている。「世界宗教」に貢献しうる「特殊な」使命を設定する普遍主義は、国民という体験によって与えられているのであることは留意されねばならないだろう。

また、矢内原は天皇を「凡ての人間と同様、造物主に相対して人性を有つものである」³⁰と、神性を認めず人間であると主張し、「日本的基督教に取つての試金石は神社問題、国体問題又は国家主義の問題である」³¹と国家神道を批判しえた。したがって、これまでの神学における多くの先行研究でなされてきたように、彼の天皇制肯定の立場ゆえに「限界」を指摘して議論を終わらせてはならない。そのような言説自体が、戦後の脱天皇制社会からの認識にすぎないのである。

しかし、矢内原の著作中の「天孫人種」という言葉からわかるように、矢内原は万世一系の神話を受け入れているのであり、そのゆえの問題性も内包している。つまり、天皇制賛美ゆえに、記紀神話にまで批判が及んでいないのである。

天孫降臨の神勅に匹敵する同じような性質の神話を、私共は創世記に見るのであります。……アブラハムに対してエホバ神が与え給うた約束と天孫に対して天照御大神が与えた約束とは、世界歴史に於て相匹敵する二大事実である³²。

このように、矢内原は記紀神話と創世記の神話を「世界歴史に於て相匹敵する二大

事実」と捉えるが、どのようにしてこれらが接合可能となるのかを全く述べない。つまり矢内原は、記紀神話を公的な国体として、創世記を私的な信仰として自らの中で棲み分けを行い、それを彼の民族観から、国家と、「血縁上の御本家、宗家」の双方において元首たる天皇において接合したといえる。それゆえに、戦後体制に移行する中で台頭した、天皇擁護を掲げる戦後の保守陣営を肯定することとなり、戦後の支配的イデオロギーに与する結果となってしまったのではないだろうか。

(付記)

本稿は、日本基督教学会近畿支部会（2010年3月29日、同志社大学で開催）における研究発表「矢内原忠雄の『日本的基督教』に関する一考察」に加筆修正をしたものである。

注

引用に際して、内村と矢内原の文章のうち、旧字体を新字体に、旧かな遣いを新かな遣いに改めた。

- 1 内村鑑三「JAPANESE CHRISTIANITY. 日本の基督教」『内村鑑三全集』25、岩波書店、1980年、593頁。
- 2 原誠「戦時期のキリスト教思想——日本の基督教を中心に——」同志社大学部神学部基督教研究会『基督教研究』61-2、1999年、81-88頁。
- 3 古屋安雄、大木英夫『日本の神学』ヨルダン社、1989年、11-17頁。
- 4 近年の代表的なものとしては、芦名定道「『アジアのキリスト教』研究に向けて——序論的考察——」現代キリスト教思想研究会『アジア・キリスト教・多元性』8、2010年、79-104頁。
- 5 竹中佳彦「敗戦直後の矢内原忠雄——民族共同体と絶対的平和——」『思想』822、岩波書店、1992年、52頁。

管見の範囲では、矢内原の戦争批判および植民政策学、経済学を主題とした先行研究は以下の通りである。ただし、戦争批判と植民政策の双方の連関を扱っている研究も多数あり、一つの主題に明確に分けられるものばかりではないことに留意されたい。

前者の例として、長幸男「矢内原忠雄の学問と思想」『思想』453（岩波書店、1962年、26-46頁）、藤田若雄『矢内原忠雄 その信仰と生涯』（教文館、1967年）、西村秀夫『矢内原忠雄』（日本基督教団出版局、1975年）、太田雄三「『平和主義者』矢内原忠雄について」同『内村鑑三——その世界主義と日本主義をめぐる——』（研究社、1977年、375-406頁）、渡部恵一郎「矢内原忠雄」藤田若雄『内村鑑三を継承した人々（下）——十五年戦争と無教会二代目』（木鐸社、1977年、299-322頁）、佐藤全弘『矢内原忠雄と日本精神』（キリスト教図書出版社、1984年）、大河原礼三『矢内原事件50年』

(木鐸社、1987年)、飯沼二郎「新渡戸稲造と矢内原忠雄」同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会編『キリスト教社会問題研究』37(1989年、401-414頁)、量義治『無教会の展開 塚本虎二・三谷隆正・矢内原忠雄・関根正雄の歴史的考察他』(新地書房、1989年)、竹中前掲「敗戦直後の矢内原忠雄——民族共同体と絶対的平和——」『思想』822(岩波書店、1992年、52-86頁)、宮田光雄「近代日本のキリスト教平和思想——内村鑑三の非戦論——」同『宮田光雄集』5(岩波書店、1996年、262-315頁)、将基面貴巳「矢内原忠雄と平和国家の理想」『思想』938(岩波書店、2002年、27-47頁)、高木謙次『矢内原忠雄とその周辺』(キリスト教図書出版社、2005年)、江端公典『内村鑑三とその系譜』(日本経済評論社、2006年)、千葉真「非戦論と天皇制問題をめぐる一試論」『内村鑑三研究』40(キリスト教図書出版社、2007年、88-133頁)、大本達也「キリスト教徒としての矢内原忠雄の戦争観——植民政策と再臨信仰——」京都外国語大学留学生別科編『日本語・日本文化研究』14(2008年、25-37頁)、拙稿「天皇観と戦争批判の相関関係——矢内原忠雄を中心にして——」現代キリスト教思想研究会『アジア・キリスト教・多元性』7(2009年、51-72頁)、拙稿「矢内原忠雄の正戦論」同志社大学部神学部基督教研究会『基督教研究』71-2(2009年、57-74頁)など。

後者の例として、長幸男「矢内原忠雄の学問と思想」『思想』453(岩波書店、1962年、308-318頁)、中村勝己「矢内原と経済学 1矢内原における信仰と経済学」『内村鑑三と矢内原忠雄』(リポート、1981年、197-274頁)、柳父閑近「矢内原忠雄——帝国主義とファシズム批判の預言者」キリスト教文化学会編『プロテスタント人物史』(ヨルダン社、1990年、180-211頁)、田中和男「地域研究としての植民政策—矢内原忠雄におけるオリエンタリズム—」同志社大学人文科学研究所『社会科学』47(1991年、291-306頁)、竹中佳彦「帝国主義下の矢内原忠雄——一九三〇—一九三七年」『北九州大学法政論集』20-4(1993年、129-186頁)、村上勝彦「矢内原忠雄における植民論と植民政策」『岩波講座 近代日本と植民地 4 統合と支配の論理』(岩波書店、1993年、205-237頁)、駒込武『植民地帝国日本の文化統合』(岩波書店、1996年、IV章)など。

- 6 拙稿前掲「天皇観と戦争批判の相関関係——矢内原忠雄を中心にして——」を参照。
- 7 矢内原忠雄「日本の基督教」『矢内原忠雄全集』15、岩波書店、1964年、222頁(以下、『全集』)。なお、引用部分の旧字体は新字体に、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。
- 8 「基督教の主張と反省」『全集』18、738頁。
- 9 「基督教と日本」『全集』18、698-701頁。
- 10 「日本的基督教」『全集』18、211-212頁。
- 11 同上、218-219頁。
- 12 同上、223頁。
- 13 内村鑑三「今秋の運動」『内村鑑三全集』9、岩波書店、1981年、388頁。
- 14 『マルクス主義とキリスト教』(単行本、初出1931年)『全集』16、17-36頁。
- 15 「宗教改革論」『全集』15、141頁。第一次大戦後から第二次世界大戦終結に至る時期までの、マルクス主義からの立場を含む反宗教運動については赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』校倉書

房、1985年、第四章を参照されたい。

- 16 「無教会主義論」『全集』15、12頁。
- 17 「宗教改革論」『全集』15、134頁。
- 18 無教会史研究会編著『無教会史Ⅲ 第三期 結集の時代』新教出版社、1995年、26-27頁。
- 19 森本あんり「文脈化神学の現在——「アジア神学」から見た「日本的キリスト教」解釈の問題」『宗教学研究』346、2005年、27-28頁。

当然のことながら、文化は複合的なものであるから、キリスト教を土着化させるに際して「日本」のなかでも「伝統的な宗教文化のどの層、どの領域を選ぶのか、ということ」、例えば内村や矢内原が主張したように武士道がその対象として適切であったかが問題となる（芦名定道「「アジアのキリスト教」研究に向けて——序論的考察——」現代キリスト教思想研究会『アジア・キリスト教・多元性』8、2010年、85頁）。

また、この問題については次の文献も参照。Aloysius Pieris, S.J., *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988.

- 20 磯前順一「解説 ディアスポラの知識人 タラル・アサド——他者と共に在ること」タラル・アサド『自爆テロ』荻田真司訳、青土社、2008年、170-247頁。
- 21 「民族と国家」『全集』18、279-281頁。
- 22 同上、283頁
- 23 同上、299-300頁。
- 24 「悲哀の人」『全集』18、540頁。
- 25 「基督教と日本」『全集』18、701頁。
- 26 土肥昭夫『日本プロテスタントキリスト教史』新教出版社、2004年第5版（初版1980年）、398頁。
- 27 「民族と国家」『全集』18、300頁。
- 28 姜尚中『ナショナリズム』岩波書店、2001年、58-59頁。
- 29 古屋安雄、大木英夫『日本の神学』、11-17頁
- 30 「日本精神の懐古的と前進的」『全集』18、81頁。
- 31 「基督教と日本」『全集』15、50頁。
- 32 「国家興亡の岐路」『全集』19、171-172頁。